

---

月 刊

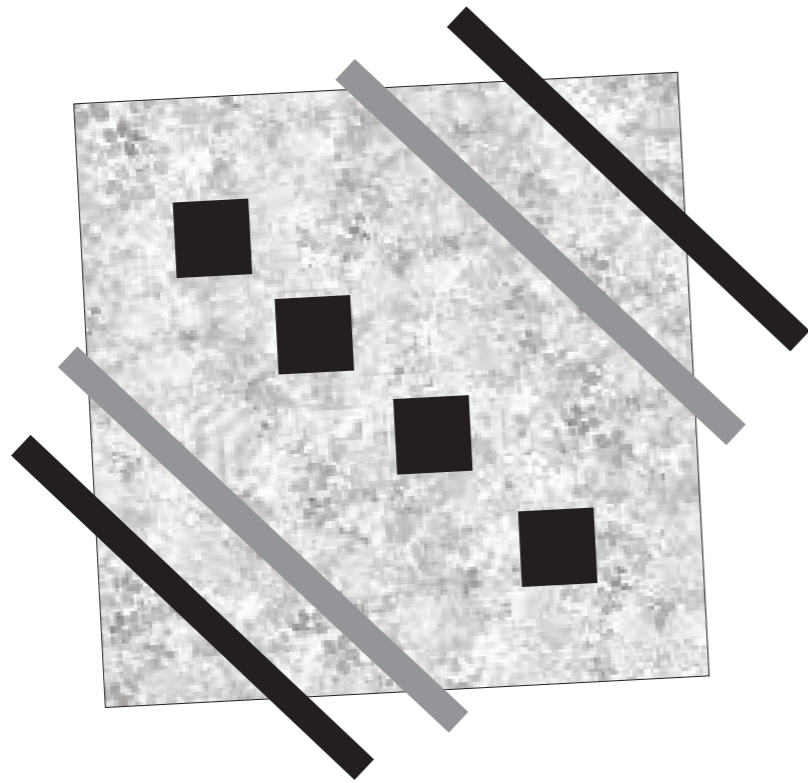
---

# MéLange

---

Vol.154

---



---

2020.08.30

詩と評論

---

月刊「MéLange」

Vol.154.2020.08.30

「月刊めらんじゅ」編集部

# 連載小説

## カフカ教団 ⑧ 高木敏克

門番の鼻は太ったネズミに見えた。  
 「ところで、その鼻の傷は猫に噛まれた傷ですか」  
 「どうしてわかるのですか」  
 「わたしも時々鼻を噛まれるからです」  
 男はいつまでも笑い、ネズミが踊りだした。  
 地下通路を進むと天井のむき出しのパイプから水が落ち、白い蝙蝠がぶら下がっていた。蝙蝠は、ほのかな月明かりを受けて鈍く光る青い運河を見ていた。小さな川船が横に揺れながら近づいてきた。深い紫が河口から寂しさを流していた。  
 いつの間にか水路は川の広さになり、水中にレールが走っているのが見えた。列車がやってくるものとばかり思っていたら、別の川船が数隻つらなつてやってきた。  
 「地震沈下で地下鉄が水に沈んだだけです。そんな驚いた顔はやめてください」持ち場を離れた門番がどこまでもついてきていた。  
 小船には屋根はなく風に流されているようにも水に流されているようにも見えた。  
 プラットホームは限りなく続いていった。そのため、誰も降りようとしなかった。  
 「どうしてプラットホームには終わりが無いのだろうね」  
 「ここでは、全部が駅だからですよ」  
 「そうか、駅が道になっているのだね」  
 流れる船は止まることがなかった。風が風景を絶えず書き直していてレールの平行線は交わることがなかった。海では時間が空を絶えず書き直しているからだ。  
 船の中には動かない人影がうずくまっていた。  
 男はブツブツと何かを言っている。

「困ったことだ。困ったことだ」  
 と独り言を言っているのだ。  
 「何かこまっているのですか」  
 男はしらをきるように向こうを向いた。  
 「ここで、駅を探してもムダですよ。すべてが駅ですから」  
 「わかつている。それが問題ではない」と、男は笑いながら鼻をかいていた。  
 先ほどの鼻を猫に噛まれた男を思い出して探した。門番と入れ替わるように大きな白い猫が白い蝙蝠を口にくわえてついでに替わっていた。  
 「誰だ、お前は。おい、返事をしろ」とわたしは猫に言った。  
 「はい」と言おうとして猫は蝙蝠を離してしまった。  
 すると猫は元の門番に戻ったので二人は黙って歩くことにした。  
 やがて、二人の前を作業服の男が三人歩いていて行く手をふさいだ。背景が暗いので青い作業服は浮かび上がって見えた。作業員たちは手に長い杖を持ち、その先のスポットライトでプラットホームと水路を交互に照らしていた。  
 「作業中すみません。山椒魚でもいるのですか」  
 「地下水脈の調査中です」  
 男がプラットホームを照らすと中から地下静脈が浮き上がった。  
 「地下水脈はこの道の下に流れているのですね」  
 「ここはもとも地上の路地でしたよ。倉庫街の煉瓦塀が地下に沈んで地下道の壁になったのですが、その当時の地下道はまだその下に流れているのです」

「月刊めらんじゅ」154号 目次

## 詩・俳句

- 憂紀 ……………にしもとめぐみ 4  
 帰還不可 詠(俳句) ……………岩脇リーベル豊美 4  
 アボガドロ数ほどの涙……………野口裕 5  
 舗装/塩酸爺……………中嶋康雄 6  
 みずぎわ……………大橋愛由等 8  
 西の街で、ことがほどける ……………大西隆志 9

## 小説

- 航海日詩……………高木敏克 13

## 連載小説

- 8回目/「カフカ教団」……………高木敏克 3

## 評論

- 立ち読み人の斜め読み 五(筒井祥文論筒井祥文川柳句集『座る祥文・立つ祥文』を読む)……………野口裕 10

## 連載エッセイ

- 〈本のひと皿〉「アダムカイクか、目玉焼き」……………安城位久緒 7  
 「益田つこ通信 No.47/No.47」……………元正章 12  
 神戸詞あしび 142「近江から比叡山經由で京に入る経路たどる旅」……………大橋愛由等 20

編集部日より★74/「第二波」もピークを過ぎたようだが、新型コロナウイルスの蔓延は8月末になっても続き、終息の気配は見えてこない。「第三波」が12月になったら、飲食・宿泊業はさらなる打撃を受け、繁忙期の売上も壊滅的になってしまうだろう。今年も東京オリンピック後の経済の落ち込みが予想されたが、それを上回る経済活動の停滞が起きてしまった。マスコミは盛んにコロナ事態以後に新生活が始まるかのようなネタを毎日流している。ポストコロナで変わってしまうこともあるだろうし、変わらないことも多々あるだろう。その見極めは難しい。時が解決してくれるだろう。例年なら、ロルカ詩祭のある8月は、「Mélange」例会は休むのだが、今年は3月から5月までコロナ禍で休会したため、8月も開催することにした。読書会は、3月に予定していた高木敏克氏の「連載カフカ語り『城』」がテーマです。今年夏の成果として、俳人で詩人である加藤郁乎の俳句をツイッターで一日一句、合計で50句読むことにした。特に第一、第二句集に集中して読むことにした。この時期の作品は、俳句というジャンルにとらわれない詩精ゆたかな世界が表現されている。それは①五七五という十七音字にこだわっていない。②季語・季感をほとんど使用していない。③切れ字が見当たらない。などである。季語にかわる文化コードとして、西洋の文化風土の中でつちかわれた神話や歴史、人物が頻りに登場する。これは季語のように時季(とき=四季)と直結・表現するものではないが、共通記憶の詩句として俳句という定型詩に活用されるものと思われる。(大橋愛由等記)

## ◆ 憂紀

にしもとめぐみ

やむことを忘れてしまつて  
やむことを忘れてしまつて

長い雨季は雨季であることも

忘れさせ

降りそそいでいた陽も

思い出せなくなる

雨は心にしみ込み

蝕み

病み

朽ち果てる

外では雨音が続いている

雨明け方にはひどくなる

## ◆ 帰還不可 詠

岩脇リーベル豊美

受難の小径 悲しくなくも緋の涙

制覇の陰謀 釣舟に海底隆起する

実存の甘み とどめて橋落ちる

柳と白樺の葉々 重なる蒼穹

異神批判に 凍てつくレセプション

生贄の下顎 化石となり降る

帰郷には隠語で即答 架空盆

地上絵に やや角度つけ地層掘る

グーグルマップから消える 狐火に

天逝スパイ容疑者 慈雨の空港

言論の空間 密すぎて過呼吸

明石魚棚 晩夏に瞬くロルカ

世界新記録 千年先の子らの夏

## ◆ アボガドロ数ほどの涙

野口 裕

倒れ臥して並べられた緑の柱はツともシとも読めるクレヨン

の字 ピース缶にフェルトペン入れてもつと書けもつと描けと囃子言葉

コックリさんの数式に浮かんだ螺旋文字に水落とせば

横槍を入れた見せ消ちしみひろがりぬ

ゆえに万物流転か万象静止かと死者にあやまる頃合いは

どこもかしこも昇天像だと愚痴つてばかりの相槌に空振りし

再放送の暴れん坊將軍は成敗というばかり

死んでしまったコメディアンに助けを呼ぶわけに行かず

リモコンボタンをひとつひとつ丁寧

に押すだけ

神なんか求めないぞ

意地でも偶然に賭けてやる

中嶋康雄

ちがうと思いたいその行き先は  
やっぱり昨日に似た場所だ  
うつむきつづ  
かびを吐き吐き  
また

もうなにもすることがなく  
ほかにほだれもないまま  
ただもじもじしている

土の中でも  
骨のまわりの  
のこりすくなく  
うすくらやみへ  
つれて行かれるのは  
たのしい

石のすきま  
薄まる濃度のまにまに  
まだらにぶよぶよ

たべている  
みあげれば  
死に殻のくも  
ほどけてゆく一条  
ゆがむ息  
舗装の温み

中嶋康雄

塩酸爺が道路に落ちたガムをひっぺがし  
食べている  
皺しわのガムをがむしやらに噛み

口から鼻から白い煙も出ているが  
青黒い感熱紙に今さら残された字は  
古代の文字で塩酸爺の母しか読めないが  
彼女は失禁するばかりで吠えるばかりで  
もう言葉じゃないかもしれないし  
あの世界で一番大きい花のなかで

あの世界で一番怠惰な花蠅と  
濃密に発酵した蜜を酌み交わしつつ  
塩酸爺の住み処は自ら朽ちかけている  
屋根瓦が昨日も公衆道路に落ちて散乱  
屋根は空に向かって

ぼつかりと微笑んでいる  
夜になると尖った月が刺さっている  
刺さった場所がどどんと錆びるが  
塩酸爺が嘗めると急いで仮の光沢を取り  
戻す

塩酸爺がいびきをかいている  
塩酸華子がひたすらひたすら爺の目鼻を  
剥いている  
萎びた突起物を嘗めては益々

それは煙を出して爛れていくが  
不正渦巻く公益団体ではたいへんに好評だ  
理事たちが布マスクを外しながら  
「今のトレンドは家事だからねえ」

今どきの家電製品は放っておいても動くので  
塩酸華子は家の中で爺の屁を集めるばかり  
うわごとが混ざり始めると朽廃がにこにここと  
全自動洗濯機のリズムでまた踊り出す  
「下着が絡まり合って極秘のお話をしている  
よ」

焼けた紙巻煙草をむしやむしや食べる爺に  
塩酸華子が抱きつく  
柱が倒れる床が傾くいよいよ

## アダムかイヴか、目玉焼き

安城 位久緒 / Anjo Ikuo

「筏の上のアダムとイヴ」(Adam and Eve on a raft)。聖書物語で  
はなく、気取らない料理の名前である。卵を二つ、目玉焼きかポ  
ーチドエッグにしてトーストに乗せる。米国では、昔ながらの大衆  
食堂(ダイナー)で働く人の「業界用語」らしい。

最初に知ったのは、イギリス文学。「アラビアのロレンス」ことF・  
E・ロレンスの著書『造幣所』の中だった。アラビアでの毀誉褒貶と自  
己矛盾を振りはらうように、英国空軍に一兵卒として偽名で入  
隊しなおしたロレンス自身の体験を描いた、ルポルタージュ的な自  
伝だ。訓練基地にいた主人公(ロス二等兵)とロレンスは一足先に  
配属が決まって去ることになり、兵舎では急遽、仲間が食糧をか  
き集め、シートをテーブルクロスにして「宴会」を開く。メインディ  
ッシュのひとつが、「筏の上のアダムとイヴ」だった。ロンドンの下町、  
ホクストンの言葉とわざわざ説明してあるから、一九二〇年代の  
英国では知られた料理名でなかったのかもしれない。罵声飛び交  
い、汗と機械油まみれの荒々しい日々が続いたあと、戦友の気取  
らない人情のありがたさを、主人公が感じるエピソードだ。そん  
な場面に、目玉焼きの素材さと滋味はふさわしい。「アダムとイ  
ヴ」は、目玉焼きとして私の記憶に焼き付いた。アダムとイヴが人  
類の始祖というなら、目玉焼きは、まさに卵料理の原点だろう。

カップルならぬ一つ目玉が乗るだけで、トーストばかりかハンバー  
グでもナシゴレンでもこちそう度がある。目玉焼きは主役であ  
り名脇役だ。近頃の、何にでもポーチドエッグや温泉卵を乗せれ  
ば洒落ているかの風潮のかたわら、目玉焼きだって上等なのにと、

ひとりひっそり、応援してしまっ。

学生の頃、友人がフランス語学校で知り合った、年上で飄々とし  
たバイク乗りの兄さんの家に数人で押しかけ、手料理をこちそう  
になった。「なにかもの足りないな」ともう一品を作ってくれたのが、  
期待に反して、シンプルな目玉焼きだった。そこに塩をひとふりし  
たら、プジョーのどろりした木製ペーパーミルを回し、黒胡椒をほ  
らり。これが、想像を超えて美味だった。卵が、目玉焼きが、とん  
でもないご馳走と思える。ついでに、自分で稼ぐようになってペッ  
パーミルを買うと決意した。

後年、『コクトーの食卓』(レーモン・オリヴェ著)を古書店で見つ  
けた。目玉焼きが、マルチ芸術家ジャン・コクトーのお気に入りだっ  
たという。あの博覧強記でもあった兄さんは、美味な目玉焼きを  
「いまひとつの出来だ」とつぶやきつつ、この本も脳裏に浮かべていた  
かもしれない。コクトーの友人であったシェフの調理法では、皿にバ  
ターを落として溶けひろがるまで火にかけ、一度火から下ろした  
皿に塩をふたとこぼし卵を割り落とし、自身の形を整えて再度、  
火にかけて焼く。軍隊や大衆食堂のアダムとイヴより随分優雅  
だが、一見単純な卵料理の奥深さと面白さを教えらる。ちよう  
びり黒胡椒する仕上げと焼き方へのこだわり、学生時代の目玉  
焼きの感動も淡く蘇った。ペーパーミルを手に入れたのも、その頃  
だったろうか。クラシックなフランスのプジョーはまだ敷居が高く  
思えて、簡素でモダンなドイツのWMF製を選んだけれど。目玉  
焼きは今も、なつかしい神話のように食卓と心を照らす。



## ◆みずぎわ

大橋愛由等

蹂躪の鐘が鳴るとき疾駆する林檎たち

（へ回れ右した犀の視線の向こうにあった呆然を拾ってみる）舗道に水をまいていたらによつきり生えている劣情を摘み取ろうとすこしばかりかがむ。大地の内奥から水音がしてきてその流れにそって歩いていくとナルキッソスに出会い「ぼくって今日も川面に向かっていってるんだよね」などと言う。あけもどろにわたしの頭上を通過していった独白鳥は昨日の山の森に渦巻いていたルルの音をわたしに伝えようとしているのだろうと窓を開けてみると新聞配達人と向きあつてしまひ「あなたまた三角を見て泣いていたね」と見破られている。へマリアは別れ際にいつもこう言うんだね。「一瞬が眠りにつく時コスモスはいつもがっかりしてるの」へ世界はもう遮断と寡黙が始まっているというのに、わたしは石が放蕩を尽くしていることがいかに愚かなことを語るために偽書にマーキングしていたら、午前4時のラヂオニュースで蟲たちが左回転のダンスを始めたと伝えていた。へもうおしまいなんだからと母はエプロンを革命色に染め直そうとしてへ無媒介を繰り返す電信柱たちがはためく幡にシーニュを刻印するため、どれほど多く詩人に石礫を投げると効果があるのか、あるいは朝風に含有している蝶の嫉妬をいかに言語化すればいいのか、街路樹からじみでる実存という名の蜜を採取するための呪詞を知っている少年がどこの団地に住んでいるのか。あたたかな緑茶をのみながら、日時計が教えてくれるのを待っている、そんな一日であつたでしょう。

## ◆西の街で、ことがほどける

大西隆志

加古郡の蛸草村で  
母が産まれたのは  
八月八日で八並び  
西の街でふと思う  
空中で形象した茸  
胞子は世界を覆い  
一人一人の意味が  
ほどけはじめたか  
バスも路面電車も  
皮肉な形にねじれ  
低い音がつらなる

喉の渴きを覚えた  
地ビールの入った  
グラスを手にする  
八月とは辛い月か  
向日葵の野を思う  
退化するのは誰か  
生き延びる悲劇に  
煙にもなれないで  
空は反転していく  
降り注ぐ光と粒子  
浴びまくれと言う

記述された言葉に  
ジャンプするのは  
何も知らない若手  
死者が奏でる音よ  
ラップ音に乗せた  
希望の言葉の先に  
鳶の先っぽが延び  
世界を包み込むか  
八月の真空に律動  
を投げ入れていく  
きみはぼくを連れ

## 筒井祥文川柳句集

## 『座る祥文・立つ祥文』を読む ⑤

野口裕

「立ち読み人の斜め読み 四」に書いた筒井祥文遺句集読解の続きになる。

筒井祥文句における韻律の多様化への指向は、同音語の反復という現象も引き起こす。しかし、同音語の一種である同一語の反復が韻律の強調だけかという点、そこは微妙である。その先を

あり余る時間が亀を亀にした  
で、考えてみよう。

この句で、最初に出てくる亀と、後に出てくる亀は同じものと見なせるだろうか。当然、亀は亀であるから同一のものだとして、同一語反復は句形のリズムの要請のみから来たものである、と見なす立場もあるだろう。

しかし、この立場は、先行する語句との絡みを考慮すると、時間があり余らずに足りない時は「亀は亀でない」というパラドックスを引き起こす。亀イコール亀であるというトリートロジーに見えながら、亀ノットイコール亀でないとするパラドックスを内包している。小生の見るところ、「A||A」は常に「A#A」を内包するように見えるが、そこまで踏み込まずとも上掲句での道筋は見えている。

「A||A」や「A#A」は無意味に見えながら、しばしば手を替え品を替えて様々なジャンルから発信される文となる。古典では、「伊勢物語」の、月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身ひとつはもとの身にしてあたりを上げておこうか。哲学では弁証法がそうであろう。

顧みれば、ヴァイトゲンシュタインの  
「語り得ぬものについては沈黙しなければならない」

に本人がどのような意図を持ち、どのような文脈から発した言であっても、語り得ぬものを語る意欲をかき立てる言葉であることは間違いなく、文の肯定形、否定形を越えて、梁塵秘抄の「遊びをせんとや生れけむ戯れせんとや生れけん遊ぶ子供の声きけば我が身さえこそ動がるれ」とも通底してしまふ。したがって、「A||A」や「A#A」に代表される文形がなにゆえ語る意欲をかき立てるのかを解明する必要性がある。

ここで、ラッセルの行った論考を参考にしよう。ラッセルは数学の集合論に矛盾があることに気がついた。それは「A#A」形に代表されると思われるが、分かりやすい例では、

クレタ人が、クレタ人は嘘つきだ、と言った  
とするパラドックスに見ることが出来る。

〈クレタ人は嘘つき〉が本当のことだとすると、嘘つきが〈クレタ人は嘘つき〉と言ったことになり、〈クレタ人は嘘つき〉は嘘になる。本当のことから出発して、いつの間にか嘘に変わってしまう。他方、〈クレタ人は嘘つき〉が嘘だとすると、クレタ人は本当のことをいうことになり、〈クレタ人は嘘つき〉は本当になる。嘘から出発しても、いつの間にか嘘と本当が入れ替わってしまう。

ラッセルはこの矛盾を解決すべく、「タイプ」という概念を持ち込んだ。「タイプ」なる概念の意義を乱暴に言ってしまうと、二回出てくるクレタという言葉のどちらかに括弧をつけて区別することに相当する。

〈クレタ人が、クレタ人は嘘つきだと言った〉に括弧を付けて、〈クレタ人が、クレタ人は嘘つきだと言った〉とすると、〈クレタ人〉はクレタ人から浮き上がってしまうが確かに矛盾はなくなる。『クレタ人』をクレタ人から棚上げすることで解決に至る。

翻って考えてみると、こうした文章に出会った時に我々は無意識のうち、こうした操作を脳裏でやっている。

たとえば、「日本人には建て前と本音があるからなあ。やつぱり日本人は嘘つきや。」などとのたまう酔っ払いがいれば、「お前も日本人やろう」などと絡む酔っ払いも容易に想像される。

## 立ち読み人の斜め読み

この矛盾解消の手順を、括弧付け作業、あるいは棚上げ作業と呼んでも良さそうだが、「あり余る時間が亀を亀にした」に適用して、「あり余る時間が亀を『亀』にした」とすることで、句の底にある意味を汲み出すことも出来るはずだ。ただし、ここで読み手はどちらに括弧を付けるべきかを無意識のうちに行っていることに注意しよう。

あり余る時間が亀を亀にした

あり余る時間が『亀』にした

あり余る時間が『亀』を『亀』にした

どの操作が句を印象深く読み取ることが出来るかに、読み手は自然と誘われてしまう。木乃伊取りは木乃伊と化し、

あり余る時間が『亀』をした

あり余る時間が『亀』を『亀』にした

あり余る時間が『『亀』』をした

論理上は無限の階梯があるように、読み手もまた、無限連鎖の中の牢獄に囚われる。

このように、括弧付け作業は「A||A」か「A#A」かにかかわらず成立するので、どちらの形式を選ぶかは、作者の裁量に委ねられている。

「これはパイプではない」と題してパイプを描く画家があれば、「鳥の巢に鳥が入つてゆくところ」と詠む俳人もある。とある詩人が開く括弧（の）を付けて閉じる括弧（）を付けない形式の詩をしばしば書くのは、この括弧付け作業の延長上にあるのではないかが小生の管見だが、真偽は如何。閑話休題。短五七五の場合、同音語・同一語の繰り返しが意味の階梯の上り下りと詩形のリズムの要請が拮抗して働く。意味の階梯の上下動が強く働くこともあれば、意味よりもリズムが先行することもある。

くしゃやくしゃの縮図くしゃみが止まらない

トコトンヘコトンと放つ水すまし

ご破算で願いましてがごわごわと

つべこべつべこべつべこべと刻む

は、リズム先行の例。

自転車で来たので自転車で帰る

半分は嘘半分は滑り台

あり余る時間が亀を亀にした

は、意味の階梯の上下動に属するか。

四句目は、括弧付け作業の別バージョン、同一語の繰り返しではなく語の否定がそのまま意味の階梯を駆け上がるテクニク、古典に例を取れば、

見渡せば花も紅葉もなかりけり浦の苫屋の秋の夕暮

などに見られる、否定することによって『花』も『紅葉』も括弧付けしてしまふテクニクとの合わせ技という側面を有する。しかし、これを論ずるのは現時点の小生の手に余る。

確かなことは、同一語を五七五を取り込んで、意味の階梯の上下動とリズムの多様化を両睨みにしながらの作句を祥文が心がけていたことだろう。

没後一周年の偲ぶ会も、コロナのために延期になったままである。せめて偲ぶ会が予定される時期までに祥文論を書くつもりであったが、百日近くずれ込んでしまった。あらためて不世出の川柳作家であったなという思いが頻りである。



## ◆益田つこ通信

元正章<sup>はじめ</sup>

### ▼47号／「野に遺賢あり」〈2020.08〉

日曜日、礼拝前のひと時、NHK 8時からの放送『小さな旅』を観るのを常としている。地方に住む生活者の日常生活がさりげなく描かれている。今まで金曜夜のBS『新日本風土記』もよく観ていたものだが、風土に密着して生きている人々の生活像に触れることで、今でも熱く旅情を掻き立ててくれる。

ここ半年間、変わるものと変わらないものとの差異に揺れ動きながらも、コロナ禍にからめとられることはなかった。毎朝6時からのFM『古楽の楽しみ』を聴きながら、新聞を読むことで、一日が始まることには何ら変わりない。あたりまえであったものがあたりまえでなくなったことへの不安と恐れは、誰しも感じさせられたであろうが、帰るべきところがある者は、強いし、耐えていける。

山形県の農民作家・真壁仁著『野の自叙伝』（民衆社）を紐解く。約40年前『野のしおり』を刊行、編集したとき、「また思えきみは朽ちにし廃墟の石のごとく／沈黙をもて／か」のひとを／花たらしめしを」（詩集『失意と雲』文中『廃墟』より）を根本概念とした。真壁は書く。「ぼくは野に立った。それは野良であり、生産点であり、生活圏であった。（中略）野に遺賢あり。（中略）世界をよこせ」。

益田の地に、果たして「遺賢ありや」。心にコスモスを持ち続け、「精神の自作農」を目指して、田舎牧師はこの地を「わが根拠地」にしたい。先人の遺訓に学びたい。最初のをを大切にしたい。

## ◆益田つこ通信

元正章<sup>はじめ</sup>

### ▼48号／「コロナ禍に思う」〈2020.08〉

「（島根）県は9日、益田市の40代男性が新型コロナウイルスに感染したと発表した」と、11日の新聞にて報道。その日、松江市でもサッカー部で91人も集団感染があり、島根県民は突如の発表に震撼させられることになりました。益田市など、今まで感染者ゼロであり、心の底では、どこか他人事のように受け止めていたところがありました。が、いよいよ「わが事」として向き合わざるをえなくなりました。教会でも早速12日に臨時役員会を開き、対策を講じました。基本的には、「これまで以上に注意喚起を続けながら、高齢者には特に配慮して、礼拝は続行する」。

コロナという名前を耳にして、もう半年以上も経ちます。その間ほとんどの方が、感染者の数に一喜一憂し、目に見えないウイルスに振り回されてきました。どこか過剰に反応してしまふ自分が不自然でありました。「この世界は美しいものだし、人間のいのちは甘美なものだ」（『大パリニルヴァーナ経』）。コロナ禍は、逆にこの真実を思い起こさせるものでなくてはならないはず。思」とは、「田」に「心」と書きま。人は心の中に田んぼを与えられています。そこに何を植え、どう耕し、成長させるかを考えることが大事。「思」。それは思想です（千玄室）。「油断してはいけないけれど、恐れすぎず心までコロナにからめとられてしまわなようにいたいと思います」（ある教友からのメール）。なお、8月23日昼から29日までの神戸への帰省は延期します。

（編集部註／この「益田つこ通信」は、島根県益田市にある日本基督教団益田教会の牧師である元正章氏が月間で発信しているハガキ通信を転載したものです）

## ◆航海日誌

高木敏克

祖父の航海日誌に気づいたのは小学校に入る前であったが悪魔の持ち物のように見えた。使われなくなった書齋の片隅の本棚の引き出しの中に粉を吹いた暗黒の革表紙には船の名前だと思えるSRUSという銀色の活字がめりこんでいて、それが何なのか、よく読めないまま忘れてしまった。覚えていたことといえば紙面には文字の列が藁の束のように並んでいることだけだった。その後、祖父に見習って日記をつけ始めたのは小学生の時だったがすぐに書くことを見失って一月も続かなかった。僕にとつての日記とは悪夢の記憶であり、やがて墓石の下に埋めるべき憂鬱であり、その闇の中には家系というものが蛇のように這っているように思えた。祖父は船に乗っているあいだ何も楽しいことがないので航海日誌をつける祖父はかわいそうだと思った。ところが祖母の思いは違った。

「あれは航海日誌なんかじゃないよ。航海日誌というものはお祖父さんの乗っていた船のものだよ。そんなものを家に持って帰ることなんかできないよ」

「でも、あれは確か航海日誌だった。お祖父さんは仕事の途中で家に帰ってきてそのまま家に忘れたんだ」と僕はいうことをきかなかった。

今になって分かるのは、あれは公式な航海日誌ではなく、勝手な空想で膨らんだ日記のようなものだった。日記をつける暇があったら僕には他にいくらでもすることがあった。小学校に入つて漢字も読めるようになると祖父の航海日誌は無くなった。祖母はすべての記憶とともに祖父を葬ろうとしたのかもしれない。もし記憶が消えずに生きただけ増えたとしたら、やはり恐ろしいことだと子供心に思った。思いつくたびに過去がよみがえり、やがて未来を闇の中に埋めてしまふのではないか。祖母には消すに消せない、死ぬに死ねない過去があり、その記憶を消そうとしていたのは明らかだった。そのため眠れないか悪夢にうなされるのであった。

「そのうち、わたしや全て忘れろ。全て忘れて極楽ゆきさ」

「じゃあ、忘れなかつたら地獄に行くの？」と、僕は余計なことを言いたかつた。そんな僕に不吉な宿命のようなものを感じたのか、祖母は釘をさすように睨み返した。

「大人になつても、小説家と哲学者だけにはなつたらあかんよ。いろんなことを思い出して夜も昼も眠れなくなつて血を吐いて死ぬからね」と理屈を覚えた少年の僕を捕まえて言ったものだ。他人の言ったことをいつまでも覚えている孫に不安を感じたに違いなかつた。

「忘れるためには死ぬしかない」と僕は言い返し、祖母は泣きだした。

それから全てを忘れる仏壇の線香の煙で記憶を湧き上げさせていた。

確かに、祖母の人生は不幸の連続のように見えた。伴侶の船は樺太沖で沈み、悲しみが癒える間もなく今度は息子が満州の戦場で毒殺された。僕が知りはじめた「死」というものは、いきなりすべての思い出を水平線で切り裂き、暗黒の深海に沈めるものだった。記憶の切断面が真っ暗の船影となり、虚しく風にさらされる旗のように大海をさまようのだ。

僕が初めて船に乗つたのは父が招待された進水式の時だった。海には海鳥の影が虚無のように舞っていた。造船所のドックには木造の床が張り巡らされて色とりどりの人々で埋め尽くされていた。立ち並ぶ見物客の隙間から覗くと巨大な船がそそり立っていた。船首の先に回ると船は不思議なことに消えて無くなるほど細くなった。万国旗と紙テープが真っ青な空の下ではためき、金髪の夫人が手を挙げる。シャンパン・ボトルが大きく揺れながら船首に吸い込まれ泡が立ち鳩も舞い上がり風船が揺れながら鳩の群れを追つた。僕はすつと口を開けたままになり、父に口を閉じるとまた怒られた。進水式の騒ぎにつられてトンビの暗い影が上空で鳩を追っていた。

船乗りになるといずれ帰れなくなる。それがわかっているから父は船に乗ろうとしないのだ。それなのに父は僕を船に乗せようとしていた。

「船乗りは三代目から悪い記憶が遺伝する。だからお前は二代目の船乗りになれる」と自分は悪い記憶から逃れようとし

た。父はまるで悪い記憶から完全に解放されたかのように全てを原稿を焼きさそうとするユダヤの作家のような憂鬱な顔をしていた。

進水式の後、父は勉強になるからといって僕をドックに入つて修理中の船の方に連れていった。やはり父は僕を船乗りにしようとしていたことがわかつた。それ以外に僕にはタラップを歩かなければならない理由がわからなかつた。僕は母と一緒に移動式のタラップを甲板の高さまで登らなければならなかつた。そのタラップは子供が登るには傾斜がきつすぎるといふことで気を利かせた水夫が少し寝かせただけかもしれない。あるいは長すぎたので少し寝かせただけかもしれない。そのため階段の平板が奥に傾いて足の裏が滑り込んで膝小僧が上の段の平板にぶち当たり一步一步が嘔まれるように痛かつた。その痛みはタラップを降りるときには膝の裏に移つた。膝の裏の腫れが切れそうなるほど痛かつた。船の明暗を初めて見せつけられる結果となつた。

甲板には不思議な穴が空いていた。大きな風洞には「すらすはいしゅつちゅう」と書いているのだと父はいった。その横にも穴があり、そこからは下が見えた。甲板の下は地獄の暗さで中には小さな光が蠢いていた。水夫がやつてきて「中は覗けません」と注意されて僕はほつとした。

しかし、どうしても船内の地獄の見てみたいという想いに耽るようになった。その想いが叶えられたのは学生アルバイトで沖仲仕をやつた時であった。子供の時には読めなかつた「スラッジ排出中」の意味もこの時にわかつた。

タンカーがドックに入っている二三日の間に重油ボイラーの耐火煉瓦を入れ替える下請け作業にありつけた。和田岬の造船所の中に下請け会社の飯場があり、そこからドックまで走らなければならなかつた。早く出て遅く出ても走らなければならなかつたので僕は遅く出た。下請けの作業は元請けに常に監視されているという強迫観念がそうさせたのだ。トラックから大きな耐火煉瓦を運び続け、タラップと機械室のさらに急傾斜の鉄の階段を上し続けた。昼休みに腹をすかせて床の上へたり込んで会社から配られた冷えたアルミニウム缶の弁当箱を開けた。食堂の中国人が呆れかえつてその光景を眺めていた。タンカーの乗組員たちは湯気に蒸され油に光る中華料理を腹一杯食べながら、椅子の上から床に座る



我々を見ながら何も見ないふりをしていた。

僕が船員になったのは大学時代のこのアルバイトがきっかけだ。造船所の下請け会社の紹介で船会社に入ることができた。自分では思っていた。勤務期間は一月から四月と七月から四月まで、残りの四月月は航海士の資格試験準備期間となっていた。日本と中東を結ぶ航路だが、運ぶのは石油関連の重機械だった。船舶用機械は大型で大量の鉄を必要とするので船体とともに製鉄所のある工業地帯で造られる。製鉄所があればそこに石炭が搬入される。いわゆる鋼鉄航路と呼ばれる航路だ。祖父の時代には樺太から神戸を経て九州を結んでいたが、父の時代に燃料が石炭から石油に切り替わると鉄鋼航路は北から南に移り中東まで延びることになった。父は東南アジアの鉱物資源の採掘権を持つ商社で働いていた。残念なことに、僕の就職先を陰で決めたのは自分だと親戚が集まると語っていた。さらに残念なことに僕が乗船することになった貨物船シリウス号の船長は父のことを知っていた。挨拶にブリッジに上った時には船長の純白の制服がやたら眩しかったが、船長室に再び訪ねた時には窓辺に何故か真つ白な猫が座っていた。白い部屋、白い窓枠の中に金色の猫の目が二つ海を背景に光っていたのだ。

「シャブロン」と船長は猫を呼んだ。細い声で猫は返事した。

航海に出るときには全ての過去を忘れて未来の世界に生きようと思っていたのだが、洋上に出ると自分には整理のつかない記憶しかないことがわかった。記憶が消えないのはなんらかのトラウマのせいだと以前から主治医からは言われていた。海のように湧き上がる記憶を消し去る方法を真剣に考えた。僕はあの父親の「記憶は遺伝する」という呪いの言葉に捕らえられていたのだ。祖父の記憶を遺伝しているのかもしれない。僕の時間は未来に向かって進んでいるつもりでも過去に遡及しているのかもしれない。僕は記憶に閉じ込められるのかも知れない。水平線を見ても僕は未来から隔離されて閉じ込められているように感じた。僕は銀色の海に目を眩ませていて、水平線の向こうには真つ暗な宇宙の闇が待っていた。僕はその暗闇の過去に吸い込まれそうになっていた。これは文学の宿命的な憂鬱だと思えた。哲学と文学は僕を救えないと思った。科学と語学の方が未来に開いているはずだと思った。商船大学も外国語大学も二期校と言われ裏方の専門学部

「でも、研究熱心なだけかもしれない。学術論文のために標本を集めているのかもしれない。誰も胎児の標本を見たわけでもないだろう」

「いや、気がつかないか、あの先生の顔はあまりにも左右非対称だよ。あれは内面的なものが原因だと思うよ。絶えず存在の矛盾を抱え続けていると違和感で顔は歪んでくるものだよ」と、わかつた風なことをクックはいつた。

「石森先生は心理学者じゃないよ。だから、好き勝手なことをカウンスリングの時に言っているだけだよ。昔は脳外科だったらしいが、脳腫瘍ができて自分の脳の一部を切除してホルマリン漬けにしているらしい。それで脳外科から追い出されてこの船で流されているわけさ。でもホルマリン漬けの自分の脳をインシュタインの脳だと言い張って大切に持ち運んでいるのだよ、怖いだろう」

それからしばらく経って、僕の症状はいよいよ酷くなってきた。もともと共同生活には馴染めなくて、一日中どうしたら一人だけの空間が得られるものかと考えていた。当然のことのように不眠症になった。眠れなくなると考え事をするしかないが、幻想の速度が考える速度を追い抜くようになってきた。記憶が悪夢となって襲いかかってきた。あるいは僕は悪夢を記憶しているだけかもしれない。幻想なのか、記憶なのか、悪夢なのか、わからない狂気が現実を忘れさせていることは確かだ。図書室の赤いソファに座ると何時も恐ろしい夢が目覚めた。

「お前、最近目の色が変わってきたぞ。闇の中の恐怖を睨みつけている目だな。お前はすでに狂っていると言われたのと同然だ」一等航海士のタカさんが寝起きの僕にまたパワハラ発言をした。

目が覚めた夢の中では、インシュタインの幽霊が出てきて、暗闇の中から喫水の丸窓から大きく舌を出して覗き込み、かがががと笑うと無数のコウモリがインシュタインの口から溢れ出して、部屋の中を飛び回り、天井からハンモックに包まって次から次にぶら下がりはじめた。やがて、コウモリの声は耳鳴りに代わり、暗箱の部屋の中でダイナモエントンのノイズが滑らかに回り始めた。

食堂にはいつも「叫びと囁き」としか言えないノイズがちちこめていた。厨房の冷蔵庫の音と食器の音の間から呻き声

だが、外国語学部はなんとなく気楽そうに見えたので最も簡単な言語のヘブライ語学科に入った。だが、誰にもヘブライ語が分かるとは言わなかった。そのことを隠すために、僕はフランス語を必死で独学したしヘブライ語の学生なんて数人しかいないのでいつもフランス語学科の友達といた。フランス語学科と誤解されたかった。しかし、ヘブライ語というのは極めて渋い言語で国際金融ではかなり特異な幅を利かせていた。

僕は語学で昔の言葉を入れ替えようと思った。外国語で考えると思回路や記憶回路が変わるのではないかと思つた。思いついたのは船に辞書を持ち込むことだ。それも日本語の無い英英辞書と仏仏辞書だけだ。これを使いこなせなかったら笑ひ者になるだけだと覚悟した。しかし、英語で日記を書くこともできないまま祖父の航海日誌の書き方をしている気分がする。やはり記憶の海に溺れる恐怖から逃れることはできない。おそらく人間はこの恐怖から逃れるために歳をとると忘却能力が発達するのだ。

シリウス号には幸いなことに話のわかる船医が乗り込んでいた。つまり、患者の気持ちになれる医者で自らも病んでいた。医務室に入るとホルマリンの匂いがした。これは普通の病院の匂いではない。僕はすぐに引つ返した。

図書室の真下のある我々の船室には二段ベッドがあつた。われわれ若い船員はハンモックを使って寝ていた。そのほうがベッドは乱れないし清掃も簡単で清潔が保たれる。あとは好みの問題だが、僕が感じる利点はダイナモ・エンジンの地獄の振動を和らげてくれることだった。ハンモックの素材にもよるが鉄柱のフックからぶら下がって寝ていると振動は快い揺れに変わっていた。ハンモックは窮屈そうに見えるが、足の位置が高いので足のむくみは取れトイレに行かずに朝まで熟睡できた。

ハンモックに揺られながら吃水線の円窓から夜の波を見ながら眠ることは幸せであつた。それはまるで波に浮かんでいる気分させてくれるのだ。

すると、廊下をコトコツとなる足音が聞こえてくることがある。船長が歩いているのだ。

「何故あんな足音だろう。杖でもついているのかなあ」とリユウに聞いた。

「いや、船長は義足だよ。その昔、貨物船が沈没した時、傾

が聞こえていた。何も欲しくない。誰にも会いたくない。夢も欲望もないので生きる理由がないと生きていけない。子供の時からのぼんやりした話の中に根をはるような憂鬱が僕を包みはじめていた。誰か話し相手がいらないのか真剣に考えた。やはり、医者と話すべきだろうと思つた。

次の日の昼食の後で、僕は一人で診察室のドアをノックした。中に座っている石森先生はライオンのような鬣が額を覆い表情が読み取れない。あだ名は獅子舞だった。

「わたしはこれでも笑っていますよ」と先生は気を利かせたみたいに、まるで金属の表情で金属の声帯を震わせた。

「わたしの顔は歪んでいるでしょう。あなたとは食堂や図書室ですれ違っていますが、気がつかないでしょ。白衣を脱ぐと猫背の清掃員にしか見えないですからね。でもあなたの叫びとささやきはいつも聞いています。なぜなら、わたしは特別な本しか読みませんし、話が誰とも友いません。食事も特別なものしか食べられない。顔が歪んでいるせいですよ。その結果、私には他人には聞こえない声がかえるのですよ。これは脳外科の手術の結果でもあるのですよ。側頭部をえぐつたので顎が歪んでしまつて強く噛むことができないのです。だからもつぱら流動食です」

再び石森先生の顔を見た。彼は自分が病氣なのに他人を治療しようとしているのであろうか？

「先生、もう十日も寝ていませんか。僕は睡眠障害だと思つたのですが、僕には既往症として解離性同一障害 DID というのがあります。突然独り言を言いますが厳密には独り言じゃなく、別人が喋っているのです。もう一人の自分ではないということです」

「それで、一番登場する人の名前はわかりますか」

「はい、会ったことのない祖父です。祖父は僕が生まれる前に海難事故で死んでいます。それにもかわらず、祖父は語りかかっています。まるで祖父の記憶が僕に遺伝しているのかと思うほどはつきりと聞こえます。先祖の記憶が遺伝するなんて医学的にはあり得ないでしょう。友達に言ったら笑われましたよ。記憶が遺伝するわけではないでしょう。しかし僕にはいろんな人の記憶があるのですよ。だから解離性同一障害だと思つていますが」

「そういう話は慌ててしないほうがいいですよ。まずい小説でも読みすぎたのでしょうか、真面目な話とは思えません。わたしの専門は脳神経外科でしたが自分自身が脳の外科

いた鉄のドアに片足を挟まれたらしい。それで、部下に足首をノコギリで切らせたらしい」

僕は、毛布を頭から被つて悪夢が襲い掛かるのを耐えている。船長が通るとシャブロンいう大きな白い猫が犬のように付いて歩く。大猫はそのまま自由に船内を歩き回り、潤滑油の匂いに対抗するようにマーキングの尿を飛ばす。去勢していないので、かなりのストレスで凶暴になっていた。船内には至る所にキャットウォークがある。狭い鉄骨の上なら全て自分の道だと猫は思っている。

船長の仕事は航海計画の通りに船を走らせることだ。だから航海日誌は日記ではない。三等航海士の僕は航路が通過点から少しでもずれていたり、通過時刻からずれていたりしたら、そのずれた内容を全て航海日誌に記録しなければならぬ。それ以外の出来事は原則的に書くことはできない。船長が航路の物語を書き、僕は単にそれを読んでいるだけだ。真実の物語は夜に作られるものであり、人生も航海もそれに従うだけだ。歴史の中に物語を見つけたとしても、誰かが計画した物語を読んでいてだけで、作者以外の役者が知る真実は全て断片なのだ。

図書室で雑誌をめくっていると事務部の連中が雑誌を覗きにきた。

「僕は心身ともかなり具合が少し悪いがこの船の先生は少し変わっているよな」と僕は聞いた。

「知らないのかな、あの先生には変な取集癖があつて、南海航路の国々で昆虫の標本を買ってきて隠しているんだよ。中には高価な絶滅危惧種の標本も隠しているらしい」と事務部のクックがいつた。

「ラムサール条約違反ですか？」と聞いてみた。

「いや、誰も見ていないが怪しいらしい。それも正常じゃない標本だと思つよ」とクックは答えた。

「ええ」と僕は吐きそうなふりをした。それからクックの顔を見た。

「あの先生は、ある日おおげさに包装紙に包んだ大きな瓶を厨房に持ち込んで、一日だけ冷蔵庫に入れてくれと言つてきた。でも、中身の解らないものは預かれないと言つたら、黙つて出て行つたよ」とクックの右手の指は紙袋のピーナツをほじくりながら口に運んでいた。誰にもやらない勢いで。

手術を受けたために外科手術ができなくなりました。そこで精神科の診察も兼ねて乗組員のカウンスラーも任されているのです。わたしは医者であると同時に患者でもありますからね」

「そう言われて、石森先生の顔をあらためて見た。明らかに頭蓋骨を分解して組み直した跡がある。

「その傷は手術をされた跡ですか」

「医師は半分の顔で笑い、もう半分で泣いているようにも見えた。

「そうです。大手術だった。脳の一部を切除しましたからね。後遺症が残りました、このようにおかしな会話しかできません」

「少しもおかしなことはありませんよ。外国人が話しているように聞こえるだけです」

「それではお話をあなたの症状に戻しましょう。おじいさん以外に登場する人はいるのですか」

「それが、破滅的です」

「破滅的？」

「ハンモックの中にもう一人の自分が寝ていたのです」

「それは他人の顔を自分の顔だと思つているだけです」

「つまり、自分の顔を忘れたということですか」

「そうです。鏡を見ると他人の顔が見えるかもしれませんが、からかわれていると思つてあらためて石森先生の顔を見た。

「先生、それは僕が他人と入れ替わられたということですか？それは先生がインシュタインと入れ替わる程の変身ですか？」

石森先生はそれには答えずに話題を勝手に変えた。「私は先生と呼ばれたくない。患者を可哀想だとも思っていない。もしどうしても私のことを先生と呼びたいのなら、私も患者ですということはありません。患者だからと言つて、卑屈になる必要はありません。患者は少し変わった精神の形をしているだけです。私は仕事柄かなりの文学小説を読むのですが、作家には解離性同一障害と共通する特色があるので」

「つまり、小説を作家の症状として読まれるということですか？」

「カフカなんかを読んでいると創作行為は治療の方法のように思えます」



「そうですか、僕は病気の力で小説が書けると思うのです」  
僕は石森氏をかけたがえのない人だと思いはじめた。カフカの全集が図書室にあることも安心した」  
「ところで、あなたのおじさんの顔はあなたに似ているのかも知れませんね」と笑って見せたが、もう半分の顔は怒っていて、  
「もう一人の自分がいるなんて悪い冗談ですよ」と、つけくわえた。

診療室から大きな音がしたのはその日の夜中の一時ごろだった。アインシュタインの幽霊は最初船腹の丸窓のガラスを舐めていたが、どうやら自分の脳の一部がホルマリン漬けになって医務室にあるという話を白コウモリから聞いた。白コウモリにその話を吹き込んだのは白猫シヤブロンだった。そこで白コウモリは白猫に連絡してアインシュタインを案内せよということになった。幸いなことに診察室のドアは開いていた。石森先生はある客室に呼び出されて、そこご婦人の終わらない船酔いの処方を考えていたのだ。シヤブロンは窓の外から指示を与えるアインシュタインの幽霊の言うことを聞いていた。と言ってもガラス越しだし、アインシュタインは両目を大きく開いて舌を長く出して診療室の窓ガラスを舐めるばかりだった。潮風が当たりパリパリの塩の結晶が窓ガラスに張り付いていた。それを舐め続けるうちにアインシュタインはホルマリン漬けの自分の脳の一部を探すことを忘れてしまった。大きな音を出したのはシヤブロンだった。勢いよく書棚のてっぺんに登ったシヤブロンは窓の外に見せようとしてホルマリンのガラス瓶を前に押しやっただのだ。するともう止まらなかつた。ガラス器は床に落ちてしまったのだ。石森先生の脳の断片が床の上で潰れた。長らくホルマリンに酔った灰色の脳は原型をとどめなかつた。

「本当に嫌な猫だ」こう語るのは猫嫌いの小森通信士だった。彼は白猫を「ポワロ」と呼んだ。猫は彼のことをポアロだと思つた。この話は今、しっかりとこの航海日誌に記録することになった。

「ところで、あなたの話ほどこまが現実でどこまが夢だろう」と石森医師は僕の狂気を揺り起こすようにして聞いた。  
「シャブロン」と呼ぶと猫は返事した。「ヘアロン」と呼んでも返事した。人の数だけ猫の名前はある。猫はその名前も自分の名前ではなく、呼んでいる人の名前だと思つている。廊下からは不眠症で苛立ち、他人まで同じく不眠症にしてやろうと思つている教官めいた点検当番の甲板長の声が聞こえてきた。

「この船には猫以外にも密航者がいるかも知れない。この部屋にドアがないことを良いことに、誰も知らない密航者は乗組員を一人海に投げ込んで、その人になりすますのだ。気を付けろ」  
ハンモックの者もベッドの者もこの声ですつかり眠れなくなつた。甲板長が消えてからボンボン喋り始めたのは通信士の小森さんだ。みんなは彼のことをコウモリと呼んでいた。  
「いいですか。密航者がいたとしても誰もわかりませんよ。最初からこの船に乗り込んでスパイみたいに我々に馴染んでいる。現体制の中でおとなしく生きていますが、それは自分本来の生き方ではなく虚偽の生き方だと思つている。そのような生き方はもう一人の自分の分身が生きているだけで、本人は仮死状態で無意識の深い海の中で眠っている。しかし、いつか復活したいのですよ。復活だけを希望して自分を殺し続けてスパイのように生きています。それが密航者なので、それはみんなの心の中に潜んで生きているはずだ」  
部屋は急に冷え冷えした沈黙に沈んでいった。この話の最後のオチが良かった。まるで自分は密航中の革命家だと言わんばかりのアジェーションだった。

自分を見つめているもう一人の自分がいるというのは何もおかしくないことではないと思う。しかし、もう一人の自分が意識として出てくる虫だ。それが復活なのだろうか？キリストの復活の革命家なのか？  
喫水の丸窓の外では暗い闇の海が渦巻いていた。戦に敗れた同志たちの屍の群れがどんよりと渦巻いて、水の声で叫びながら沈んで浮かび、浮かんで沈みながら、ときどき喫水の丸窓から我々を覗き込んでいた。コウモリは革命現場に必ず帰ってくる。スパイ・コウモリは自分が革命家だと匂わせながら反革命の秩序の中に棲んでいる。  
密航者と血の中の二本の指は誰にも見つからなかつた。そ

「全部本当ですよ」「いや、夢だろう。ほら、私の脳の断片は元のまま棚の上にありますよ。小森君がそんなことを話さないだろう。だつてアインシュタインの幽霊の夢を見たのは君で小森君は君の夢を見てないのだから、全ては君の狂言ということでしょう」  
「先生、僕の解離性同一障害はまだかなりひどいのではないか」  
「いや、この航海日誌を熱心に書き始めてからだいぶよくなつてきましたね」  
その日の昼食では何か異常事態が発生しているのではないかとということが話題になった。

「通信士の小森さんはこのところ通信室から出てこない。何かの異常があつたに違いないです」  
甲板員の太った男がご飯のおかわりの後でさらにパンをつまんで言った。  
確かに小森さんの最近の様子はおかしかつた。深刻な青い顔をして受信した外国語を翻訳できないらしい。

「石森先生も最近出てこなくなつた。何かあつたに違いないよ」  
「二人の間に何かあつたのかなあ。二人はもともと相性が合わないみたいだつたな」  
発生したのは異常事態ではなく、不吉な現象だつた。機関室では燃料の重油の残量の話ばかり。このままでは輸送中の重油に手を出さなければならなくなる。この燃費の悪さを調査しに燃料パイプを調べていた時であつた。二人の中国人乗組員が赤いランプをカンテキのように掲げながら歩いてきた。

「君たちのライトは何でそんなに赤いのだ」  
「この人の指を探しているからです。タービンの回転部に巻き込まれてそのまま遠くに飛んで行つたのです。血の色は赤いライトで闇の中でも見えるのです。ほら見てください」手のひらの血の中に二本の指が蠢いていた。  
「それで、石森先生のところに行くのですか」  
「行きますよ。どうしてもつづけて欲しいですから。でも、どうしても二本が見つからないのです。何処に消えたのでしょうか」

その後残り二本の指が見つかつたという報告はなかつたが、シヤブロンが人間の指をくわえて飛んで出た、という話しか残っていないみたいだつた。

れからというもの、僕は誰にも会いたくなくなつた。会うと演技をしなければならぬので、それは会つたふりをしていただけかも知れない。その日も僕は一人になる方法を考へていた。船に乗つていて一番の楽しみは一人になることだ。ところが船の上ではそれが最高に難しい。目をつぶつて眠るふりをするしかない。僕は何も食べたくないのかもしれない。規則正しい生活が規則正しく食べさせているだけかもしれない。僕は養老院の老人みたいになつた自分を感じることがあつた。ここには疲れるほどの仕事はない。もしこの船が帆船ならどんなに楽しいだろうと思つているのは僕だけではない。それができないからみんな一人になりたいのだと思つた。

船の上の話は風に吹き飛ばされて誰にも聞こえない。だから内緒話は吹きすさぶ潮風のもとで話すのが一番のストレス解消だつた。聞き役はいつもリュウだつた。

「考へても見ろよ。船は会社なのだ。しかも体育会系の間はかりで、多くはヨット部の出身者だ。船主の会社もヨット部を持つているが、二十年近くも保険会社のヨット部に負け続けている。自分の乗っている船が自衛隊やヨット部のOBで固められていることぐらい分かっているはずだ。だから、あの小森はコウモリと呼ばれるのだ。あいつは、ただ主人公にありたいだけだよ」

僕はこう言つてみたものの、今の話は全て自分を押し隠すために言つているのかも知れないと思へた。その昔見た「戦艦ポチョムキン」という映画を思い出した。革命が起こるときには急に白旗が赤旗に変わるのだ。コウモリは半分明るく半分くらい空を好んで飛び回っている。この船には何匹かのコウモリが巣食つていて、シヤブロンはコウモリ退治のために船長が中に入れたのに、いつもコウモリに騙されている。ところで小森さんだが、彼は猫が嫌いだ。シヤブロンは化け猫のように巨大化し、コウモリにはついていけないが、小森さんの首筋なら噛み砕けると考へている。

そして、急なことを思い出した。航海日誌には公式の航海日誌ともう一つ裏番の私的航海日記があるはずだ。航海日誌は会社の船から持ち出せるわけがない。あれは、もう一つの夜書かれたに違いない記録なのだ。祖父も本当の航海日誌を書きたかつたはずだ。僕が今書いているように。  
「俺は風下にいたので君たちの話は全て聞いたよ」  
誰もいないはずの甲板の上で二等航海士の近藤さんがビー

そして船は行き、船内にはノイズのような叫びと嘔ぎがちこめていた。それらが喫水の波の音と重なる僕にだけ音楽が聴こえてきた。船のホールには一台のピアノがあつた。誰かがそのピアノを弾くときにはホールは鉄扉で閉じられていて、誰もその演奏を聴いたことがなかった。ただ、ホールは機械室に通じていてタービンの激しい音で音楽はかき消されていく。ピアノは闇と騒音に隠れるようにして自分にしか聞こえない音楽を聴いていたのだ。  
ところが、この夜、猫の鳴き声とともにピアノ曲が僕たちの寝室に流れてきた。誰かがドアを閉めるのを忘れていたのだ。

「あのピアノを弾いているのは一体誰だろう」僕は無理やり寝返りを打つてハンモックを揺らした。  
「おそらく、ピアノを弾いているのは個室を与えられている幹部に違いない。共同部屋から出て行けば誰だかすぐにわかるだろう」

「あれはなあ、たぶん特別な乗客だよ。この船にはたしか十人くらいの客が乗っているはずだ。われわれは知らないだけで知つているのはブリッジの連中だけだよ。ブリッジから螺旋階段で降りたところに客室があるはずだ」  
「でもおかしいな。乗客が隠れているなんて密航者じゃあるまいし、ブリッジから近い通信室で寝泊まりしている通信士だよ」と甲板員のリュウがいった。

「密航者ですか。それなら心当たりがあります。この部屋にきつといます」叫びと嘔ぎの闇の中から密航者の声が聞こえた。はぐらかすために密航者はこのような発言をするものなのです。  
室内点検はいつも抜き打ちでやってくる。

「時化の夜以外はハンモックに寝るな。ハンモックに荷物を入れるな。洗濯物は選択袋に入れておけ」と甲板長が叫んだ。せつかく眠りかけたところでたき起こされるのは何時ものことで、二、三人が犠牲になつて廊下に連れ出されしばらく帰つてこない。

寝室のドアは監視しやすいように何時でも開いていると思つていたら、何時の間にか取り外されてた。そのことに気がついたのは猫が入ってきた時だ。猫は残飯をもらい過ぎて犬ほどの大きさになつていた。あちこちをうろついで階段にも迷わなくなつていて、人間を未知の世界に誘い込むのが趣味だつた。遊び過ぎた結果、猫には異様な筋肉量が付いて

チ・チエアで寝ていたのだった。  
「あの通信士はただの通信士じゃないだろう。われわれは呑気に貨物運んでいるが、あの人は情報を運んでいる高い値段で売るつもりだ。売文家だから色々書いているという噂だ。通信士にとってはこの船は情報船だよ。われわれには彼の積荷が見えない。彼はたえず何かの情報を出し入れしながら走っている。彼は放送局のように音楽を船中に流しているが、あの音楽は電波でも飛ばしているようだ。わかりますか、あの音楽は実は暗号だと私は思うのです。私は気になるのでホルルのピアノを調べてみたのです。するとピアノの腹に隠しマイクを見つけた。取り外さずに元のままですがね、あのマイクは身内放送用に通信室に繋がっているのです。そこから暗号をばらまくために人工衛星に流れていると思うのですが、どう思います」

「すると、あのピアノを弾いているのは通信士の小森さんですか、あのコウモリ野郎か」  
「いや、弾いているふりをしてるだけで、録音を流しているだけかも知れませんが、通信士ですからね。でも、よく考へてください。スパイが情報交換をしているとしたら、ピアノは弾くだけのものですか？違うでしょ。聴くためのものかも知れませんが。彼はピアノを弾くふりをしてピアノを聴きながら暗号を解読しているのです。いいですか、彼は語学の天才なのです。暗号術は語学です」  
たまには平面で眠りたいこともあつたが、僕はベッドを乱さないために甲板に出てビーチチェアで星座を見ながら眠ることにしていた。

船上から夜空を見上げると大宇宙は水平線で切り取られているのがわかる。宇宙は地球の影で半分が隠れている。これは僕が船員になつて初めて感じる寂しさだが、離島で育つたリュウには当たり前のことらしい。  
「海以外にも見えない風景の向こうには暗黒が見えてくる。その闇の中から銀河航路のように一隻の船が現れてくれ違ふことがある。しかし、距離はある。乗組員はその船はほとんど近づいてくるという錯覚に落ち込んでしまう。ところが相手の船は雪星のように目の前を流れてゆくだけなのだ」とリュウは聞えよがしの独り言を呟いた。

列島に発展した製鉄の航路は南西諸島からマラッカに抜けインド洋に抜けてゆく。リュウは船程度の大きさの沖永良部島と同じ闇を今みていることに気がつくのだった。



そして船は行く。叫びと嘔きでにぎわう懐かしいハイフア港を目指して。

洋上に音はなく、わずかに波を切る音だけが聴こえてきた。船のライト以外には光もなく上空では名前前のわからない鳥が音と光を捜して舞っていた。そんな夜中にはホールからまたあのピアノの音が聴こえてきた。大抵はシヨパンだが、ピアノが誰なのか覗きに行くと言奏をやめるかもしれない。そう思って聴き入るほどにピアノニストはうまかった。甲板のビーチチェアは快適だった。疲れた筋肉はスポーツの後のように癒されていた。ブリッジの上で動かない幹部たちは甲板でも動かずにビーチパラソルを上げて風を避けていた。

「彼らが運動不足にならないのはブリッジに登る時の螺旋階段と機関室を点検に行く時の急勾配の鉄階段のお陰だな」僕は独り言のように言ったのでリュウは返事をしなかった。

「どうして君は船に乗ることになったのですか」と僕は質問を付け加えた。

リュウはおとなしい少年のような声で答えた。声ばかりでなく顔は少年のままだった。

「俺の島は傾いた台地の島で、一方は低地のサンゴ礁、反対側は断崖絶壁なので、台風の時なんか、島は大波で洗われそうになる。津波が来れば消えてしまうのではないかと思う。それなら船に乗っていらほうが安全だろう、多分」

「そういう島なら行ったことがあるよ。確かに何も無いなあ。見えるのは鯨と海鳥くらいだ」

「確かに斜面のサンゴ礁の側では海が傾いて見える。土地が傾いているからだと思うのだが断崖のほうの海も傾いている」

「僕の育ったのは港町だけだね、やっぱり海は傾いて見えただよ。家から見る海は空からぶら下がっているみたいだ。僕には軽い精神障害があるのだけど、多分その海のせいだと思う。目が覚めて海を見ると世界は傾いているのだ。革命前夜だよ。家も海も揺れながら傾きはじめ、身体は常に滑り落ちそうに感じる。僕は目覚めても世界は空と海をまぶたのように閉じていて僕を閉じ込めようとしているのだ。この死にそんな閉塞感から逃れるには海に出るしかない。たぶん島に生まれても同じように閉じ込められていると思うだろうな」

やがて雨が降ると空と海はさらに溶け合っただけのつべらぼうの灰色の世界になる。船は汽笛を吐きながら海に浮くよりは闇に浮かぶ。闇の中にはキヤツパイが二つ金色に輝いている。船倉のシャブロンは住み着いたコウモリが一瞥を覗き通る。通信士の小森さんを襲撃しようと考えている。コウモリは甲板のストラジ抜き穴から闇に突撃し、通信士の小森さんを襲うことばかり考えている。密航を成し遂げるのは、コウモリと白猫と何人か？

海峡では緊張が高まった。どんより曇った夜の海中では渦が沈んでゆくところだった。灯台が光る丘の上の監視所では通過する船籍を記録する者がいる。彼らは灯台の光を利用してすばやくレーダーの船影と重ねて測量する。おそらくレーダーと目視の誤差を記録しつづけている。ブリッジでは丘の上の監視所の位置を調査している。丘の上では、情報が途切れる一瞬を狙って秘密の情報を海中に送っている。海中深く動きを止めた潜水艦が全てを観察し記録員が日誌に書き込んでいる。

その記録と比べたらこの船の航海日誌なんて空白だらけだ。ハイフアに下船するとすぐに諮問官の部屋に連れて行かれた。入国手続きだからそんなに時間は取られないだろうと思っていた。ところがそう簡単ではなかった。

「観光ですか、仕事ですか」

「あの船の乗組員だから、もちろん仕事です」

「どんな仕事ですか」

「測量士です」

「船の上で何を測量するのですか」

「海上を移動しながらの海岸線の測量です」

「契約書はありますか。この国で測量するには契約書が必要ですよ。この国では契約書がないとどんな仕事もできません。入国もできません」

僕が顔色を変えたのはまずかった。彼の仕事は顔色を見ることだから、顔色を見ると嘘がわかる。部屋を出ると、その出口は入り口になっていて全く同じように人が座っていた。「観光ですか、仕事ですか」と同じ質問が来た。「もちろん仕事です」

リュウは何も言わなかった。たぶん驚いているのだと思う。航海に夢や希望があったわけではない。僕の夢や希望はことごとく父親に殺されてしまったと思う。そして何の欲望も持たないように育てられたのだと思う。父親は自分のコピーを作ったために子供のすべての欲望を殺したのだ。夢殺しの父だ。僕は何かか欲しいとか誰かを好きだと思えたことがない。ともかく美味しそうに食べるふりをしたり、誰かが好きだというふりをしたりするだけだ。生きるといふことはただ丁寧に人生を演じるだけのことだった。したがって恋愛も失恋もしたことがなく見合いの話も全て断っていた。もし欲望があるとしたら遠い海の方に向こうにしかないだろうと思っていた。

昔は四時間交代の二十四時間勤務だった甲板部の勤務時間は午前八時から十二時までと午後八時から夜中の十二時までの勤務になっていた。したがって午後の八時間は陸地なら副業でもう一稼ぎできそうな自由時間であった。ホールか図書室か医務室に居場所がなければ甲板でゲームをするか本でも読むかしかなかった。趣味のない真面目な連中はいつい他人の片付け仕事を手伝ったりしていた。図書室の世界文学全集と日本文学全集は全部読んでしまったという船員は意外に多かった。その他の本棚は船員が持ち込んだ置き場所のない本で一杯になっていた。僕はそれでも辞書を読んでいた。「おい、どういう読み方をすればそんなに辞書が読めるのだ」

僕の肩を抑えながら、一等航海士のタカさんが本を探しに本棚に向かった。タカさんの趣味はポディービルで部屋中にダンベルが並んでいるということだ。

「たまにはこんなのも読めるだろう」と言いながらまたやってきてフランス語のグラビヤ雑誌を僕に見せた。ほとんどがヌード写真のページだが間に話のページがあり、そが気になるらしい。

「あとで訳して返してくれよ。俺が買った本だからな」

「それなら、辞書を買いますけど」

「いらん」と言いながらタカさんは螺旋階段に向かい、そこからブリッジに登った。それを見送るように見上げてからリュウが言った。

「図書室で辞書を引きこはやめたほうがいいよ。翻訳させられただけならいいけど、そのうち通訳しろと言われるよ。それ

「何の仕事ですか」

「測量士です」

「海の上で何を測量するのですか」

「海岸線の測量です」

「ところで、私たちは何語で話していますか」

「もちろん英語です」

「いや、先ほどはヘブライ語で質問しましたよ」

詳しい理由を告げられないまま、僕は船に戻された。これで上陸できないが、一等航海士の通訳はしなくて済むと思った。ハイフアに寄港した後のことであった。夜の出港だというのに小さなランチが後を追ってきた。水先案内が今頃乗り込んでくるはずもない。闇に紛れる灰色の船体からサーチライトで音もなく潜伏に近づくと忍者のような男が二人立ち上がりてこちらを見上げた。いきなりかぎのついたロープを投げ上げてより登ってくる速さは殺気に満ちていた。鉄柵をひらりと飛び越えて一人がすぐに僕の背後に回り首殺しの技で僕の顔を締め上げた。もう一人の男は前に回り、真っ黒な覆面のまま僕の顔を覗き込んだ。

「最後に俺の顔を見せてやる。これが見納めだ」と言いながら、さつと黒マスクを脱いだ。

その顔はまったく僕の顔と同じで甲板のライトの下で二度ほど瞬きをした。

背後で首締めする男がいった。

「これが見納めのお前の顔だ。目の前のこいつが未来のお前なんだ」

息が詰まって涙が出てきた。

「おい見ろよ、こいつ泣いてるぞ」

男の声がしたが、それが前の男の声か後ろの男の声なのかわからなくなってきた。

で出世するわけでもない。見てみろよ、みんな資格試験の勉強しているやつばかりだよ」

見てみると彼も試験準備の参考書を開いていた。それからというものの僕も参考書を開いたまま辞書を読んだり書いたりするようにした。

「存知のように、この船の通信士は小森さんという。しかし、みんなはコウモリと呼ぶ。黄昏になると現れて、甲板やホールで根も葉もない話を飛ばぶようにしてまわる。誰かに話すのではなく誰にでも話すので船内放送局とも言われるが、正式な放送の権利を持っているので海事局のお墨付きをもらっている。だから喋るときは堂々として話はいつまでも終わらない。」

「いいか、航海日誌は飛行機の暗箱のようなもので海難の際には海事裁判の証拠になる。官用航海日誌は暗箱の中に保管され、法律で決められている海運局の認証を受ける。それは単なる記録だとは言え切れないところがある。日誌は航行の記録のほすが航海日誌はシナリオである場合もある。シナリオ通りに船を走らせれば航海日誌は記録でしかないのだ。優れた航海日誌とは小説だよ。優れた小説といふものは現実の記録とみなされる。記録とは予見のことなのだ。いいか、歴史というものは夜つくれるものだ。それも誰かによつてつくられるものなのだ。歴史とは優秀な創作に過ぎないのだ」

「この調子で話されると船長といえども丸め込まれそうになる。」

「暗箱の中にはなめらかに回転する意志があるのさ」

コウモリは最後にこのように言ってみんなを煙に巻き甲板から螺旋階段を上ってブリッジに消えてゆく。

「なるほど、船長は小説家みたいなものか」とリュウがいった。

「いや、日誌を書くのは船長ではない。僕だ。船長は署名するだけ」と僕はいった。

船に乗るようになってから、祖父のあの重たく暗い航海日誌は何度も浮かび、沈む時には死にながら、「トシカツ」と叫んでいるような気がした。

大洋の風に入ると夜空の星が海面に映らないかと期待するほど鏡の海面になるが、大抵は曇天で空と海はつながって見える。こんな夜には海上を歩き人影も見えない。

2020年8月30日(日)の「Mélange」読書会における高木敏克氏「カフカ語り—『城』のためのプロローグ

三七 『きみは、所有しているかもしれないが、存在はしていない』という主張に対する彼の答えは、身震いとはげしい動悸だけであった。これは、全集第3巻の『田舎の婚礼準備』につづく『罪、苦悩、希望、真実の道についての考察』一九一七年から一九一八年にかけてカフカの思索を何冊かの青い八つ折判ノートに出ている箴言であるが、番号がふつである。ところが、これにつづくノート第三冊に再びあらわれてくるこの問いに対する答は次のようなものであった。

所有はなく、ただ存在があるだけだ。最後の息を、息絶えることを、こいねがう存在があるだけだ。以前は自分の問いになぜ答えが返ってこないか不思議でならなかったが、いまでは、どうして問うことができると信じていたのか判らない。もっとも当時のぼくだって信じてなどいなかった、ただ問うばかりであった。『きみは、所有しているかもしれないが、存在はしていない』という主張に対する彼の答えは、身震いとはげしい動悸だけであった。

ふたつの箴言の間にどれだけの時間があつたのかは判らない。ただ、カフカの執筆の流れの中で折り目をつけているふたつの箴言である。一九二二年の九月九日あるいは十日に書かれたとおもわれるマックス・ブロード宛の手紙ですでに『城』の執筆の放棄していることが書かれている。存在の境地に入っていることは確かだ。『城』は何者にも所有されることなく存在した小説である。『城』は存在獲得をめぐる所有からの脱出劇であり、流刑地からの『出エジプト記』なのかもしれない。

小説家カフカの重大な関心ごとひとつは如何にして所有や所属から逃れて純粋に存在できるかである。つまり、作家は存在すると同時に所有されるというジレンマの中に生きる存在である。『断食職人』にしろ『変身』にしろ、所有から逃れるものには再度の流刑審判が待っている。『城』は小説家にとっても詩人にとっても誠に非常に危険な作品である。

なぜならば作家や詩人が成功するということが所有されることでもあるからである。われわれが生きていくためには何かの所属し何かに所有されている。この所有から逃れることは宗教かもしれないが宗教も神を含む何者かに所有されることかもしれない。

作家や詩人は所有されることなく純粋に生きて存在できるのがカフカの問いである。

フランツ・カフカは生きていた間は所有から逃れて、商品になることもなく有名になることもなく存在を生き延びた作家とその作品であるが、今では彼の死は私を含めて多くのカフカのファンに所有されている。皮肉な話であるが、これは人類にとっては最大の喜劇なのかもしれない。カフカの死を所有しようとするわれわれは、『カフカ教団』に所属しているのではないかと

# 神戸詞あしび

142-2020.07.26 大橋愛由等

近すぎて旅の対象とならなかったが、今年は違った。夏休みらしきものをなんとか確保して、近場の近江と京を二泊三日でめぐることにした。新型コロナウィルスの蔓延によって、遠くの地域に旅をしたり他府県に移動することさえ憚られた二〇二〇年ならではの選択である。

向かったのは、滋賀県長浜市。神戸から新快速で乗り換えなしに到着した。ここは羽柴秀吉がはじめて城持ち大名になつて築いた長浜城があり、天守閣が復元されている。その長浜から船出して竹生島に向かった。わたしは初めて訪れる場所である。思っていたより小ぶりの聖地で、豊臣大坂城にあつたとされる建造物が移築されていて、そのパロディ的な絢爛さが目に焼きつく。ここは弁才天信仰の聖地であり、文学や音楽を司る詩神であるので、敬意をあらわすために、即興詩を吟じて奉納した。

竹生島から湖西方面の船に乗る。琵琶湖はあくまで波静かであった。今津港に到着。鉄路に乗り換え南下して近江舞子で下車。一泊目の宿は、オーベルジュ(宿泊施設を備えた本格レストラン)。そこでこの旅のもうひとつの目的である物語を読みあう試みを始めた。選択したのは、チョーサー著『カンタベリー物語』にある「弁護士の物語」。ローマ皇帝の王姫が中東のイスラム教国に嫁いでいく。その婚礼の宴席では、海を越えて来賓としてやってきたキリスト教徒が王姫を除いてすべて惨殺され、王姫は小舟に乗せられ漂流させられるという流離譚である。それを岩波文庫版と、西脇順三郎訳版を交互に読み進めていった。

二日目、湖西線をさらに南下して比叡山坂本へ。ここは明智光秀が比叡山焼き討ちの武功がみとめられて居城を築いた場所である(今回の夏旅は、大河ドラマ「麒麟が来る」をどこか意識している)。ここから比叡山ケールに乗って比叡山経由で京都市街地に入るうとした。

## 近江から比叡山経由で京に入る経路たどる旅



比叡山延暦寺の最奥に位置する横川地区にある恵心堂。源信が修行した場所を再現

天台宗の総本山がある比叡山延暦寺は、学生時代にいちど訪れている。そのときは学生仲間とわいわい言いながら冷やかし半分でドライブがてら行っただけにすぎない。訪れてみると宗教学都市の風格が充分漂っていた。宗祖・最澄の気配は感じることは出来なかったが、ここで学んだ円仁、円珍、良忍、法然、栄西、親鸞、道元、日蓮、一遍らが日本仏教史に確かな足跡を遺していたことは事実であり、境内には宗派を立ち上げた人々を紹介するパネルが立ち並んでいるのは印象的だった。

この延暦寺は、東塔、西塔と横川という三つのゾーンに分かれていて、横川地区に以前から訪れてみたかったので、境内を巡回するバスに乗って向かった。わたしが描いていた横川地区は、比叡山より京都市街地に近い場所だった。実際は中心地である東塔からバスでさらに10分もかかる比叡山の最奥に位置していることに驚いた。昼なお静かなそこは修業するのに最適な場所であらう。

わたしが京都市街地に近しいというイメージを持ったのは、この地に源信(げんしん)が籠もり、のちの浄土信仰に大きな影響を与える『往生要集』を執筆したことを知っていたので、より世俗に近い場所だと勝手にイメージしていたのである。ちなみに『往生要集』について、法然は「観想念仏から専修念仏へ誘引するための書」として高く評価している。

その源信が修行した方丈(恵心堂)が再現されて立っている。こうした静謐な場所でも思案していれば、新たな哲理も生まれようというものだ。

詩と評論

月刊「Mélange」Vol.154

神戸

2020年08月30日 通巻154号

発行所/月刊「Mélange」編集部

〒650-0012 神戸市中央区北長狭通 1-7-1 2F

編集・発行人/大橋愛由等(「Mélange」同人)

maroad66454@gmail.com

定価 600円(税別)